

安全文化の浸透に向けた取り組み

経営管理本部 安全企画部

1 はじめに

JR東日本グループでは、安全を経営の最重要課題ととらえ2009年4月からお客さまの死傷事故ゼロ、社員（グループ会社・パートナー会社社員を含む）の死亡事故ゼロを目指し、現在5回目となる安全5ヵ年計画「安全ビジョン2013」に取り組んでいる。しかしながら当社がJR東日本グループの一員として新たに発足した矢先の2012年4月9日、和歌山事業所において、クレーンによる荷（コンテナ側板）の移動作業中、荷に溶接されていた吊り具の溶接部が剥がれたため荷が落下。クレーンを操作していた社員が、倒れてきた荷に挟まれ死亡した。新会社発足直後に発生したこの死亡労働災害を重く受け止め、社内の安全に関する体制強化を目的に2012年5月に安全企画室（現：安全企画部）が発足した。

我々が守るべき安全には2種類ある。1つは働いている人の命を守る労働安全、もう1つは鉄道をご利用されるお客さまの命を守る製品安全である。安全企画部ではこれら2つの安全のレベルアップを目指し、安全文化を社内に浸透させるために様々な取り組みを行ってきた。

本稿では、安全企画部がこれまで行ってきた主な取り組みを紹介する。

2 安全文化の浸透に向けた取り組み

2. 1 現状把握

安全文化の浸透に向けた取り組みを進めるにあたり、製造部門の課長、係長、班長を対象に階層別にヒアリングを行い、安全面での課題の把握を試みた。その結果、「過去の失敗が事故の未然防止に活かしていない」、「課題を自分達で解決するという事に慣れていない」、「製品安全という概念があまり浸透していない」といった課題が見えてきた。今後これらの課題を克服することに重点を置き取り組んでいくこととした。

2. 2 J-TRECの安全文化の制定

社内に我々が目指すべき安全文化とは何であるか、目指すべき方向を示すために5つの文化を定めJ-TRECの安全文化として制定した。（図1）

2. 3 知識化の推進

過去の失敗を事故の未然防止に活かしていくことを目的に、過去発生した労働災害等を洗い出し、教訓とすべ

き事柄の作業標準への反映や掲示を行い過去の失敗の知識化を進めた。また先述した和歌山事業所での死亡労働災害の風化を防止するため、4月9日を安全の日に制定し、事故の概況と知識化すべき教訓をまとめたパネルを作成し社内に掲示している。（図2）

2. 4 安全キーマン

自分達の課題は自分達で考え解決するという現場の改善力を強化するため、現場の安全活動をリードできる人材を部署ごとに選抜し、安全キーマンに任命した。安全キーマンは各部署の安全パトロールや会議の運営などの安全活動を担っている。今後は他企業見学などを教育のカリキュラムに取り込みながら、安全キーマンの更なるレベルアップを目指していく。



図1 J-TRECの安全文化

クレーン作業で死亡労働災害発生

事故の概況

- 1 発生日時 平成24年4月9日 午前9時13分頃
- 2 発生場所 和歌山事業所 B棟ハウスコンテナ組立職場
- 3 事故概要 40フィートコンテナの側板を吊上げたところ、仮設掛け金（吊りビース）の溶接部が割れ、側板（約1t）が落下した。これによりクレーン操作者が落下し、倒れた側板の下敷きとなった。救急搬送したが、その後死亡が確認された。
- 4 原因 ①吊り金具の安全使用に関するルールが定められていなかったため ②側板に仮設した吊りビースの座板と側板の溶接部の溶け込み不良により溶接強度が不足したため ③クレーン作業における基本ルールが守られなかったため
- 5 対策 強度確認された吊り具を使用する。クレーン操作における基本動作を徹底する。（床上操作式クレーン操作位置の注意事項参照）

教訓

治具類は安全が確認されたもの以外は使用するな！
重量物運搬作業は基本を守れ！（吊り荷の下に入らな）

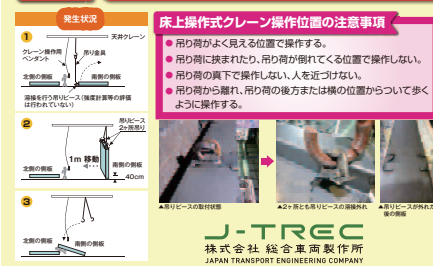


図2 和歌山事業所での死亡災害の概況および教訓を記したパネル

2. 5 安全フォーラムの開催

社員一人ひとりの安全に対する意識の向上を図り、社内の安全活動を活性化させることを目的とした新たな取り組みとして安全フォーラムを2013年6月18日に開催した。

今回の安全フォーラムでは、今まで馴染みの薄かった製品安全に対する社員の意識を向上させるため「製品安全を考える」をテーマとし、「社員意見発表」、「部外講師による講演」、「社長による講義」の構成で実施した。

社員意見発表は、より多くの社員が自らの事として安全に向き合うことを目的に行い、社員全員を対象に「製品安全を考える」というテーマの論文を募集し、応募があった中から選抜した5編の論文の発表を安全フォーラムの中で行った。

部外講師による講演は、JR東日本から安全企画部の片方主幹をお迎えし、「安全のレベルアップをめざして—自ら考え自ら行動する—」をテーマにご講演いただいた。その中で片方主幹からは、JR発足以降「守る安全」から「チャレンジする安全」へ変革していった経緯や、事実を視るということの大切さ、不断に英知と努力を尽くし高いレベルの安全を追及していこうということを我々に対し訴えられた。

社長による講義では、宮下社長が「究極の安全を目指して—製品安全を考える—」をテーマに過去発生した製品安全に関わる様々な事例をとりあげ、我々が守るべき安全の1つである製品安全がいかに我々にとって重要であるか熱く語られた。(図3)



図3 安全フォーラム（社員意見発表）の様子

2. 6 安全キャラバン

経営幹部が、三現主義で作業に立会い、現場第一線社員と直接安全に関して議論を行い、安全に対する意識の向上と風通しのよい組織づくりを目指していくための試みとして安全キャラバンを実施した。その結果、現場の

様々な課題を実感でき、また改善すべきことは分っているがなかなか行動に移せないといった会社の風土としての課題も明らかになった。今回の課題については現場にフィードバックするとともに、安全キャラバンは、今後も継続して実施していきたいと考えている。(図4)



図4 安全キャラバンの様子

3 終わりに

本稿では、安全文化を浸透させていくために安全企画部がこれまで行った主な取り組みを紹介した。安全文化が社内に根付いていくには、社員一人ひとりが安全について他人任せにせず自ら考え自ら行動するという意識を持つことが何より重要である。今後も、労働安全と製品安全の2つの安全のレベルアップを目指し様々な取り組みを行い、社員の安全はもとより鉄道をご利用されるお客さまの安全と安心に寄与していきたい。

(日高健太郎、山田彰子、坂上和孝、遠藤高史 記)